

房総の 文化財

VOL.9

ISSN 0910-0848
Bōsō no bunkazai

平成8年3月15日

財団法人 千葉県文化財センター

千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代)

FAX 043-422-8850



発掘調査速報

発見された「武将の館」 成田市駒井野西ノ下遺跡

空港にとなりあった成田市駒井野にある西ノ下遺跡からは、旧石器時代から中世にかけての多くの遺構が確認されていますが、なかでも、空港周辺ではほとんど見つかっていなかった古墳群や中世の大形建物跡が目立ちます。

古墳は、古墳時代後期の前方後円墳1基と円墳2基が調査され、埋葬施設から直刀や金箔を貼った耳飾り、ガラス玉などの装飾品が見つかりました。



前方後円墳（周溝内側で長さ32m）



埋葬施設

根木名川の支流、取香川の最も奥という辺りな土地に、前方後円墳を中心にした古墳時代後期の群集墳が営まれていたことが明らかになりました。古代の成田市域の情勢を考える上で重要な手がかりとなるでしょう。

大形の建物跡



屋敷跡や火葬墓跡など、中世の遺構も多数見つっています。特に、溝によって区画された大形の建物はほかにあまり例を見ない貴重なものです。主屋は2間×5間（1間約2m）、床面積40㎡くらいの大きさで、まわりには廊下が付けられているようです。柱を立てる前に穴を掘り、その中には黒色土やローム土を入れて突き固め、その上に柱を立てるという丁寧な基礎工事が行われています。

柱の下に置かれた板状の石が見つかった穴



この建物にはどのような身分の人が住んでいたのでしょうか。出土した遺物からこの建物は室町時代ころにあったことが考えられます。この時代は、千葉氏の系列にある大須賀氏がこの地域に領地を広げていったころであり、おそらく駒井野周辺もその支配下にあったのでしょう。発見された建物の規模や整然とした建物配置などから、大須賀氏に関係した有力な武将の居住した館跡と思われます。（栗田則久）

収蔵遺物コーナー

『漆紙』

英語で「china」というのは中国を意味する言葉ですが、「陶磁器」という意味ももっています。日本で陶磁器を「せと（瀬戸）物」と呼ぶように、その生産地名でその物を言い表すようになったものです。では、日本の英語名「japan」というと、これは「漆器」を示す言葉として使われており、日本製の漆器の品質の高さを表していると考えられます。

さて、漆はいつごろから日本で使用されていたのでしょうか。考古学の資料からは約6,000年前（縄文時代前期）までさかのぼることができます。漆は古代においては万能樹脂であり、塗料としてだけでなく、接着剤などにも使用されました。また、さまざまな装飾技法（蒔絵・沈金・螺鈿・堆朱など）を用いて、高度な漆工芸品

が作られてきました。

右の写真は、木更津市久野遺跡から出土した平安時代の漆紙と漆容器です。漆の保存には、乾燥しないように漆を入れた容器を紙でフタをし、漆が直接空気に触れないようにする必要があります。この紙が漆を吸い、長く土中にあっても腐らずに発見されることになります。この漆の着いた紙を「漆紙」と呼びます。

当時、紙は貴重品ですから、たいていは書き損じたりしていらなくなった紙（反故紙）が使われます。このため、古代の文字が現代によみがえることにはなりますが、残念なことに、この「漆紙」から文字は発見されませんでした。しかし、房総にも古代の漆職人がいたことを物語る資料として、大変貴重なものです。（半澤幹雄）



撮影：堀越知道

埋文アヲカルト

石斧いろいろ——弥生時代——

人間が、最初に手にした道具は石だったと言われています。金属の使用が一般化するまで、さまざまな石の道具が作られました。その中でも、これからご紹介する「石斧」は最もポピュラーなものでした。

石斧は旧石器時代からありますが、やはり縄文時代のものが種類も量も豊富です。斧というと、「まさかり」のように柄と刃が平行になるように付けられ、木などを切断するものです。平たい石の中央部を打ち欠いて窪ませた分銅形打製石斧・楕円形の石を磨き上げて乳棒状にした磨製石斧などがあります。

意外に知られていないのが弥生時代の石斧でしょう。写真の1・2は、尖った両刃をもつ分厚いもので「太型

蛤刃石斧」と言います。

次に現れるのが、柄と直角に刃を付けたタイプです。写真の3・4は片方にしか刃を付けていないもので「柱状片刃石斧」「偏平片刃石斧」などと呼ばれています。装着したところの絵を見るとよくわかりますが、柱状の斧には柄に固定しやすいように背中に切込みをいれた「抉入り石斧」もあります。これらはより緻密な木材加工用として普及したようです。

弥生時代になると、家の建築部材や水田用の杭など、大形の木製品が大量に使われるようになります。そうしたニーズに答えるように石斧も改良が加えられたのでしょうか。『房総考古学ライブラリー4—弥生時代—』より（谷 旬）

弥生時代の石斧と柄の付け方



太型蛤刃

柱状片刃

抉入

偏平片刃



今回は、当センターの見学会などでよく聞かれる質問の中から一つ選んで紹介します。

Q 考古学者が、遺跡や出土遺物の年代の話をする時に、「縄文時代前期」とか「古墳時代後期」などと説明していますが、専門家でないものには、それが実際に何年ぐらい前なのか良くわからないので教えてください。

A 一口に言って、弥生時代以前の年代に関して、「これは〇〇〇年前です」というような実年代（絶対年代）を示すことは、なかなかむずかしいことです。

考古学では、年代についての基本的な考え方として、古い時代の人の生活面（遺跡）の上に次の時代の生活面が重なり、さらに次の時代というように、下が古くて上に行くにしたがって時代は新しくなると考えています。

土器や石器の出土する地層の上下関係、文様や形のちがいで新旧関係を知り、時代を区分することができます。

このように年代を相対的な新旧関係でおさえています（相対年代）。したがって、各時代の実年代は分かりませんが、各時代ごとの新旧は分かっており、基本的な上下関係がはっきりかえることはありません。

では考古学の世界でまったく絶対年代（実年代）を使わないかというそうではなく、科学的方法による年代測定法が発達してきました。それを利用して年代を推定する試みや、文字が残されている時代については、その記録との対比（残されている記録と発掘調査成果による確認）による時代決定などを行っています。

科学的年代測定では、実年代の数値がはっきりと出ますが、その数値を平均としてその前後数百年から数千年単位の誤差が出ます。たとえば10,000年前±1,000年と測定結果が出た場合、その年代は9,000年前から11,000年前までの2,000年間のどこかということになります。旧石器時代や縄文時代のように何万年あるいは数千年単位で考えてい

る時代では、目安として利用できますが、この誤差の範囲より細かい区分ができていない時代（弥生時代以降）の場合は、あまり有効ではないことがあります。

したがって、考古学の世界では、相対年代を基本として調査研究を進められているのが現状です。

最後になりましたが、各時代の実年代について、おおよそのところを参考として記しておきます。

旧石器時代*	西暦紀元前10000年以前
縄文時代 草創期	紀元前10000年～7000年
早期	// 7000年～4500年
前期	// 4500年～3000年
中期	// 3000年～2000年
後期	// 2000年～1000年
晩期	// 1000年以降
弥生時代 前期	紀元前4世紀～1世紀
中期	// 1世紀～紀元2世紀
後期	// 2世紀～3世紀
古墳時代 前期	// 3世紀後半～4世紀
中期	// 5世紀
後期	// 6世紀～7世紀初
終末期	// 7世紀

※日本では、縄文時代以前は土器を作ることを知らなかった時代で、この時代は先土器時代・岩宿時代とも呼ばれており、ヨーロッパの旧石器時代に当たることから、ここでは旧石器時代という言葉を使いました。

（鈴木定明）

「房総の文化財8号」記事の訂正について
前号で記事の誤植がありましたので、訂正させていただきます。
「発掘調査速報」のコーナーで、左ページの本文9行目
誤：はじめは銀銭がつくれ→正：はじめは銀銭と銅銭がつくれ

表紙の説明

市原市武士遺跡の土器捨て場から出土した縄文土器です。
縄文時代の後期（約4,000年前）に作られたもので、樽のような形をしています。アルファベットのJの字を逆にしたような文様の下に、細長い逆三角形の文様が描かれています。堀之内1式土器と呼ばれている土器です。 撮影：堀越知道

編集後記

「房総の文化財」第9号をやっと発行することができました。本年度は、紙面の大きさもB5判からA4判に変わり、表紙も発行する時期の季節感と遺物との組み合わせを考えながら作りましたが、これがなかなか大変な作業で毎回カメラマンの堀越知道氏を悩ませることになってしまいました。

記事の内容・体裁等のすべてについてバランスのとれたものにするのは、難しいことだと痛感しました。

第7号の本欄で「一般の人々の世界と考古学の世界をつなぐ架け橋になる」と書きましたが、まだまだその道のりは遠いと思います。今後とも、皆様のご意見・ご希望等を取り入れながら、一歩ずつ進めて行きたいと思います。（S. S）